

当館所蔵の「絵入り本」解題⑥

星 瑞穂

はじめに

本稿は『北の丸』第四九号に掲載した拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題⑤」に続くものである。

本稿も前回同様、『改訂 内閣文庫国書分類目録』における「国文」の項目に挙げられている資料から、「絵入り本」を抽出して調査し、目録題の順序に拠って解題を掲載する。なお「絵入り本」の定義であるが、上記に挙げた「国文」の項目のうち、内容に添う挿絵・地図・図版など、本文中に挿絵等を伴うものすべてを対象とした。

また前号掲載の拙稿（「当館所蔵の「絵入り本」解題⑤」の【一六九】からは、挿絵等を伴う卷子装の資料の解題を掲載している。この卷子装の資料については「国文」の項目以外からも抽出している。

【二〇二】旗幟図鑑 福島国雄著 写年不明

旧蔵者不明「請求番号一五四・〇四五九」

本資料は諸家や幕臣たちが用いる旗印の図案を一覧した資料。手彩色。一軸。

冒頭は徳川御三家が用いた旗印や陣幕を示し、続いて御徒の陣羽織や御書院番の母衣など、分類して配列している。形状や模様などがはっきりわかるように彩色されている。

著者は幕臣で北条流軍字の兵法家であった福島国雄。寛政四年に幕命を受けて幕府内の武具を点検し、翌年には家伝の貝・太鼓の作法を貝太鼓役に授けた。さらに寛政七年には家伝書『士鑑用法』を將軍に講じ、以降月例となる。寛政十年に具足奉行。このとき六六歳。没年不明。冒頭は自序で、本資料の場合はこの部分が黄色の枠で囲まれている。

【書誌】

外題・「旗幟図鑑 全」無地料紙題簽（二二・五糎×一・七糎）に墨書

内題・「旗幟図鑑」

表紙・香色表紙

高さ・二七・〇糎

印記・「日本政府図書」「秘閣図書之章」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者ともに不明。

【二〇三】徳川家御旗指物 写年不明 一軸

内務省旧蔵「請求番号一五四・〇四六〇」

本資料は前掲資料同様、徳川家や幕臣たちの旗印を図示した資料。手彩色。一軸。

内容はおよそ前掲資料に共通するも、徳川家康が用いていたと伝えられている旗印や、御徒の陣羽織の組毎の模様がちがいなど、より詳細に描いた部分がいくらか見受けられる。前掲資料との前後関係ははっきりしない。

【書誌】

外題・「徳川家御旗指物」 打付墨書

内題・なし

表紙・緑色地雲丸文表紙

高さ・二六・〇糎

印記・「大日本帝国図書印」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、写年・書写者ともに不明。

【二〇四】荷蘭馬具図 近藤重蔵編 寛政六年〜九年写 一軸

内務省旧蔵「請求番号一五四・〇四五八」

本資料は西洋の馬や馬具を図示した資料で、近藤重蔵自筆本である。寛政六年〜九年にかけて編集したもの。手彩色。一軸。

本資料の冒頭にはまず西洋の白馬が手彩色で描かれており、そのあと、墨書で様々な馬具が図示されている。後半はペルシヤやトルコなどの馬が、その装飾と共に墨書で描かれており、前半と後半で用いている料紙も異なっている。（共に楮紙だが、後半のほうが薄く、裏打されていない）

これは末尾に近藤重蔵の識語があり、これによればオランダで出版された馬の図三二枚から九枚を引用し、長崎の「旅館」で書写したものだという。重蔵は寛政六年に湯島聖堂の学問吟味に及第し、翌七年から九年にかけて長崎奉行手付出役として長崎に赴いていた。本資料を編んだのはこのときのことであると思われる。

本資料は長らく重蔵の手元にあったと見られ、冒頭に朱印「正斎蔵」（四・五糎×一・三糎）が捺されている。正斎は重蔵の号である。

重蔵は寛政一〇年、幕府に北方調査の意見書を提出し、蝦夷地・千島列島・択捉島探検に赴いたことで知られる。文化五年には書物奉行を拝命、『右文故事』を編纂するなどの功績を残している。

【書誌】

外題・「荷蘭馬具図」 朱色飛雲文刷題簽（一五・〇糎×二・八糎）に墨書

内題・なし

表紙・香色表紙

見返し・紺色料紙

高さ・二七・五糎

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「正斎蔵」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

本資料末尾の重蔵による識語によれば、寛政六年～九年にかけて編集したもので、重蔵の自筆である。

【二〇五】無明一卷之抄 室町時代末期～江戸時代前期 一軸

旧蔵者不明「請求番号一五四・〇四六一」

本資料は室町時代末期から江戸時代前期に書写されたと考えられる馬術書。題は『無明一卷書』からの抄出を意味すると思われる。

本資料には馬の絵が描かれており、それを取り囲むように注記がある。これらは名馬の見分け方を書いたもので、毛並や尾の形など、名馬の特徴を記してある。

奥書には「右之一巻屋代勝介本を写差上仕候者也」とある。

屋代勝介（矢代勝介とも）の名前は『信長公記』の天正九年の爆竹や馬揃えの記事に見ることができ、詳細は判然としないものの、織田信長に仕えた馬術家だったことが想像される。『信長公記』や『甫庵信長記』に拠れば本能寺の変で討死した。

本資料は奥書のほか、蔵書印なども見当たらないため、来歴もはっきりしない。

【書誌】

外題・「無明一卷抄」無地料紙題簽（一七・八糎×三・三糎）に墨書

内題・「無明一卷之抄」

表紙・海松色表紙

見返し・金切箔

高さ・四一・五糎

印記・「日本政府図書」（蔵書表が裏面に貼付）

備考・楮紙、朱入り

【写年・書写者】

奥書には、写年・書写者に関する記述を欠くため詳細は不明。筆跡から見て近世前期の書写か。

【二〇六】銃陣図 写年不明 一軸

昌平坂学問所旧蔵「請求番号一八九・〇五二二」

本資料は歩兵銃を扱う際の陣形を描いたもの。手彩色。一軸。

本資料は西洋式の軍備を描き、歩兵の陣形や構え、大砲の配置などを描いている。人物図は簡略で、専門の絵師によるものとは考えにくい。すべて彩色が施されている。また武器や陣形についての解説が、絵図の横に墨書で書かれている。

本資料の写年についてははっきりしないが、西洋式の軍備が取り入れられたつあった幕末に書写されたものと考えられる。

本資料は、表紙に捺された「番外書冊」の墨印から昌平坂学問所の旧蔵書であることがわかる。

【書誌】

外題・「銃陣図」打付墨書

内題・なし

表紙・縹色（織）表紙

高さ・二六・八糎

印記・「番外書冊」（墨印、表紙）「浅草文庫」（朱印、表紙）「内閣文庫」

「日本政府図書」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

写年・書写者に関する記述を欠くため詳細は不明。

【二〇七】大坂卯年図 元和元年刊カ 一軸

昌平坂学問所旧蔵「請求番号特一一七・〇〇〇九」

本資料は大坂城落城の図。一軸。

本資料は大坂夏の陣の際に落城した大坂城の様子を描いたもので、当初は「読売」として一枚刷の形で販売された。大坂夏の陣（元和元年）という時期から「瓦版のはじまり」とも称される、ごく初期の読売である。

本資料は元々一枚刷りであったものを掛物として改装したものである。元の部

分はおよそ七一糎×三三糎だが、改装の際に裁断された可能性もある。縦型の掛物として表装されているものの、卷子本の体裁で題簽などが後補されている。

掛物としたときの天（卷子本として開いたときの見返し部分）には、墨書で「元和元年乙卯年」とある。

「昌平坂」の墨印が捺されており、昌平坂学問所の旧蔵であったことがわかる。

【書誌】

外題・「大坂落城之時読売／元和□／□□」（一部欠）無地料紙題簽（一

〇・八糎×一・二糎）に墨書

内題・「大坂卯年図」

大きさ・七一・〇糎×三三・〇糎

印記・「昌平坂」

備考・楮紙

【刊年・刊行者】

本資料には奥書や刊記を欠くため、刊年・刊行者は不明。後補と考えられる墨書で「元和元年乙卯年」とあるのみ。但し現存する「大坂卯年図」のほとんどが後世の模刻である。

【二〇八】東蝦夷地絵巻 村垣範正著 安政年間写

旧蔵者不明「請求番号一七八・〇六九〇」

本資料は東蝦夷地（現在の北海道東部）を見聞した村垣範正が、和歌と共にその景物を記録した絵巻。卷子装、一軸。手彩色。

村垣範正は安政元年に勘定吟味役に抜擢されて以来、箱館奉行や神奈川奉行を歴任し、万延元年には日米通商修好条約の批准交換のために副使として渡米するなど、幕末の外交に大きな功績を残した幕臣である。明治元年に隠居し、同一三年に六八歳で没した。

本資料はその範正が海防掛・蝦夷地掛として、樺太・蝦夷地の巡視を行った際の記録である。安政五年元旦、箱館で筆を起こし、和歌を書き留め、さらに箱館の港の風景や、捕鯨の様子などが詳細に描かれている。同年夏に巡視を開始し、厚岸など各地を回ってその景物を記録した。地元に住むアイヌの人々のマス漁や子供の遊びなども描かれ、また機織りに関してはその道具まで詳細に絵に残した。

絵はすべてに彩色が施されており、遠景・近景、いずれも詳細である。本資料の表紙には、外題が墨書されていた痕跡があるが、現在は判別ができない。目録題は後補。

見返しは雲母引の布目紙に、金切箔が施してある。裏打ちも雲母引料紙である。

なお、本資料には冒頭に「日本政府図書」の朱印があるのみで、他に旧蔵者を示すものがないため、来歴がはっきりしない。

【書誌】

外題・欠

内題・なし

表紙・香色表紙

見返し・雲母引布目型押表紙に金切箔

高さ・三七・〇糎

印記・「日本政府図書」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため、写年・書写者は不明。

【二〇九】更さら日記 立綱著 写年不明

石井至穀旧蔵「請求番号二六二・〇〇七九」

本資料は僧の立綱による玉川流域の紀行文。卷子装、一軸。立綱は大菅中養父に学んだ国学者で、一六歳のときに河内国に上ったのをきっかけに諸国行脚の身となった僧である。和歌・文章を能くし、四八歳のとき江戸に下って以降は江戸の歌人たちと交流した。文政七年に六二歳で没。国学者の伝記的研究『三哲小伝』や注釈書『伊勢物語昨非抄』など多くの著作がある。

本資料は江戸から玉川の上流へと向かう旅の情景を描いたもので、地のほか、風景が水墨画で描かれている。なお自筆稿本は無窮会専門図書館沼文庫の所蔵。

本資料は書物奉行を務めた石井至穀（盛時）の旧蔵である。冒頭に至穀

の蔵書印「元禄三年庚午初建玉川文庫」を見ることが出来る。玉川文庫とは多摩郡大蔵村に創設された石井家の文庫で、享保年間に焼失するも寛政一二年に再建し、特に至穀の代になって様々な書物を収集した。至穀は文政六年に御家人となり、同八年に徒目付、天保二年富士見宝蔵番などを経て、嘉永四年に書物奉行となった。安政六年に八二歳で没。

【書誌】

外題・「更さら日記」無地料紙題簽（二二・〇糎×二一・三糎）に墨書

内題・「更さら日記」

表紙・金茶色（織）表紙（但し、全体的に摩耗し、見返しの紙が見えている）

見返し・縹色料紙に金揉箔

高さ・二〇・七糎

印記・「日本政府図書」「大日本帝国図書印」「元禄三年庚午初建玉川文庫」

備考・本文の料紙は斐楮混ぜ漉きだが、絵の部分は楮紙を用いている。

彩色はなし。

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため、写年・書写者は不明。

【二一〇】大坂御城御天守図 文化四年写 一軸

内務省旧蔵「請求番号一六九・〇三三六」

本資料は大坂城の天守を図示した資料。外観および見取り図を揃える。彩色はない。一軸。

料紙は裏打ちのない楮紙を用いているが、精密に天守を描いた図面であるといえる。高さ四〇・〇糎ほどあり、卷子本としても大型。

大坂城は、大坂夏の陣で落城したのち、元和年間に幕府の直轄となり、特に二代將軍秀忠のもとで再建が開始された。寛永年間には工事が完了したが、江戸時代を通して幾度か火災の被害に遭っている。寛文五年の落雷で天守が焼失した。

本資料によれば、延宝九年に書写された大坂城の図を、さらに文政四年になって書写したという。

「望月家蔵」の朱印が見えるが、旧蔵者ははっきりしない。明治になってから内務省が購入したと想像される。

【書誌】

外題・「大坂御天守之図」打付墨書

内題・「大坂御城御天守図」

表紙・香色地横刷毛目表紙

高さ・四〇・〇糎

印記・「望月家蔵」「大日本帝国図書印」「日本政府図書」

備考・楮紙（裏打ちなし）、彩色なし、箱（紺色、四〇・五糎×五・〇糎×五・〇糎）入り

【写年・書写者】

本資料の内題に、以下のようにある。

「大坂御城御天守図／延宝九辛酉年四月藤本氏／所記之大阪「ママ」御城図ニ添フ／寛文五乙巳年正月二日亥下刻大坂城御天守雷火奥御番所竊蔵百間之所五十間焼失／文政四辛巳ノ年十月六日」

書写者は不明。

【二二一】柳宮御白書院虎之間新御殿御休息伺下絵

狩野永恵 弘化元年写 三軸

内務省旧蔵「請求番号一八三・〇八四六」

弘化元年に焼失した江戸城本丸を再建する際、製作された本丸御殿の障壁画の縮図。御用絵師の狩野永恵の手による。全三軸で、それぞれ大奥、虎之間、白書院の図。手彩色。

弘化元年に発生した火災によって江戸城本丸が焼失。大奥などに大きな被害を出した。翌年に再建されることになり、このとき障壁画を担当したのが御用絵師の狩野永恵である。

永恵は嘉永元年に御用絵師となり、徳川家斉から家茂までの四代の将軍に仕えた人物である。安政四年に法眼。明治維新後も皇居造営の際に障壁画を製作するなど、精力的に活動した。アーネスト・フェノロサと親交があったことでも知られる。帝国博物館鑑査掛などを経て明治二三年には帝室技芸員。翌二四年に七八歳で没。

本資料の一軸目は、本丸大奥の新御殿上段の間・下段の間・二之間・御

休息之間の障壁画の下絵である。上段の間は京都の春の景色、二之間・下段の間は京都の秋の景色、御入側には京都の夏の景色、御休息之間の御入側には冬の景色が描かれている。

二軸目は、江戸城本丸大広間へ向かう途中にある虎之間的障壁画の下絵。画題は虎と竹。

三軸目は、本丸白書院（将軍が執務を行う場）の帝鑑之間的障壁画の下絵。帝鑑図は古代中国の理想的な君主の故事を描いたもので、為政者の手本として好まれた画題である。

【書誌】

外題・①「柳宮新御殿御休息伺下絵」②「柳宮虎之間下絵」③「柳宮御白書院下絵」（いずれも打付墨書）

内題・①「大奥／新御殿御休息伺下絵 六卷」②「御書院番所／虎之間伺下絵 四卷合一／御椽通御長押上／弘化度何済／狩野永恵」③「御白書院／御上段御下段并御調台内／帝鑑之間惣御入側并御天井下絵／御小襖御杉戸／弘化度何済／狩野永恵」（いずれも見返しに墨書）

表紙・香色地縦刷毛目表紙

高さ・二六・五糎

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「内閣文庫」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

見返しに書かれた記述によれば、前述の通り、弘化元年に狩野永恵の手によって描かれたもの。

【二二二】御即位諸幄之図 写年不明 一軸

旧蔵者不明「請求番号一四七・〇七二七」

本資料は即位の礼の際に用いる幄を图示したもの。一軸。手彩色。

幄とは、祭礼・儀式の際に用いられる幕を張った仮小屋のことで、これらの様式は祭礼・儀式の種類や場所、時代によって異なっており、これらを正しく用いることが要求された。本資料はその検索用の資料で、即位の礼においてどのような幄が用いられたか、年代毎、場所毎に图示している。

例えば冒頭は「安永度」とあり、光格天皇の即位の礼が例に挙げられ、他にも「寛永之度」などの例が見られる。

幄については、色や寸法などが記載される。彩色は部分。

【書誌】

外題・「御即位諸幄之図」無地料紙題簽（二六・〇糎×二・八糎）に墨書

内題・なし

表紙・縹色表紙

高さ・三〇・〇糎

印記・「内閣文庫」

備考・楮紙、裏打ちなし、手彩色

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため、書写年代は不明。文化年間の例が掲載されているため、少なくとも文化年間以降であることは推定される。また蔵書印も「内閣文庫」印のほかに見られず、旧蔵者もはっきりしない。

【二二三】御行幸の次第 寛永三年刊 三軸

内務省旧蔵「請求番号二六二・〇〇五四」

本資料は『寛永行幸記』の題で知られるもので、寛永三年に後水尾天皇が二条城に行幸した際の記録。古活字版。手彩色あり。三軸。

寛永三年に後水尾天皇が二条城に行幸、このとき徳川秀忠・家光が上洛して拝謁した。本資料はこのときの行幸の様子や儀礼を記録したもので、烏丸光広の撰と伝えられる。『寛永行幸記』には以心崇伝が編んだ真名本も存在するが、本資料とは内容も大きく異なる別書である。

本資料の特筆すべき点は、古活字版であること、また一部に彩色が施されていること、そして行幸の列を為す人物たちも絵駒によって印刷されていることである。また料紙はすべて雲母が引いてある。

三巻三軸であるが、二軸目と三軸目の題簽が反対になっており、二軸目に「下」、三軸目に「中」の題簽が付されている。二軸目の中巻に挿絵はなく、本文のみ。

諸本については間島由美子氏の論考『寛永行幸記』絵巻について——四種類の古活字版とその覆刻整版と写本』（『参考書誌研究』五五号、国立国会図書館、二〇〇一年）に詳しい。

【書誌】

外題・①「御行幸次第 上」②「御行幸次第 下」③「御行幸次第 中」

雲母引料紙題簽（二三・八糎×二・八糎）に墨書

内題・「御行幸之次第」

表紙・金茶色地唐花文様

高さ・二八・〇糎

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」
備考・楮紙、一部手彩色

【刊年・刊行者】

本資料は奥書を持たないが、冒頭に「寛永三年九月六日／御行幸 二条亭への事」とある。

【二二四】建保中殿御会図 写年不明 一軸

旧蔵者不明「請求番号二六二・〇〇九四」

本資料は建保六年の中殿（清涼殿）における和歌管絃の会の様子を描いた絵巻『中殿御会図巻』の白描模本。一軸。

『中殿御会図巻』は、藤原信実によって描かれたと伝えられる記録絵巻で、建保六年に順徳天皇のもとに参じた人々の様子を描いている。原本は伝存しておらず、北村家本（九条家本、現在出光美術館所蔵）が最も古く鎌倉時代末期に書写されたと考えられている。しかし、本資料はこの本からの模写ではなく、人名注記に年齢を付している点から河本家本（前山家本）系統の模写であると考えられることができる。

本来の『中殿御会図巻』には、会の様子を記した「御会記」、九条道家の序、参列者の詠歌なども含まれるが、本資料は御会図のみ。部分的な書写で、彩色もない。外題に「建保中殿会図／詞書別冊／二通之内」と出している点から見て、元来はこの「御会記」等に相当する部分が別冊で存在したと見られるが、「詞書」に相当する資料は当館には伝わっていない。

裏打ちも軸もない状態で、しっかり装丁された資料とは言い難い。蔵書印もないため、来歴についてもはっきりしない。

【書誌】

外題・「建保中殿会図／詞書別冊／二通之内」

内題・なし

表紙・香色表紙

高さ・四七・五糎

印記・なし

備考・楮紙、裏打ちなし、白描

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため写年・書写者ともに不明。

【二二五】年中行事絵 写年不明 一軸

旧蔵者不明「請求番号二六二・〇〇七一」

本資料は『年中行事絵巻』等から一部を抄出して編集した模本。彩色なし。一軸。

本資料は主に幄を中心に『年中行事絵巻』『石山寺縁起』から図を抄出して編集している。おそらく何らかの行事に際し、先例を学ぶ上で必要となり、製作されたものであると考えられる。裏打ちはなく、いわゆる白描模本である。朱で書き込みが数か所見られる他は、彩色はない。軸もなく、

料紙を巻いた上に後補と思われる表紙が付けられている簡易的な装丁である。

印記は「内閣文庫」のほか見受けられず、来歴もはっきりしない。

【書誌】

外題・なし

内題・「年中行事絵巻」

表紙・紺色表紙

高さ・三〇・〇糎

印記・「内閣文庫」

備考・楮紙、裏打ちなし、軸なし、白描、裏に墨書「年中行事絵」

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため写年・書写者ともに不明。

【二一六】 槐門図 写年不明 一軸

旧蔵者不明 [請求番号一八三・〇八五二]

本資料は紫宸殿、清涼殿など内裏の殿舎の構造を描いた図。一軸、彩色なし。

本資料には内裏の殿舎が間取り図としてその構造が描かれており、各所に延喜年間や永暦年間の先例が注記してある。

本資料には写年・書写者に関する記載がなく、また印記についても、「日

本政府図書」の蔵書表が貼付されている他になく、旧蔵者は不明。

【書誌】

外題・「槐門図」無地料紙題簽(二七・五糎×三・〇糎)

内題・なし

表紙・香色表紙

高さ・三三・〇糎

印記・「日本政府図書」(蔵書表)

備考・楮紙、彩色なし

【写年・書写者】

前述の通り、不明。安政二年に内裏(現在の京都御所)が再建された際の記録か。

【二一七】 車絵図 写年不明 三軸

彰考館旧蔵 [請求番号一四七・〇七二八]

本資料は公卿や殿上人が使用する乗り物を図示した資料。手彩色。三軸。

一軸目には牛車が一図(「八葉車/今上女御御召之車也」と注記)描かれているのみで、二軸目・三軸目と図の数や分量に差がある。二軸目以降は、公卿・殿上人の用いる乗り物が身分ごとに分類されて図示される。墨書で注記が入っているが、これらの多くは『台記』などから先例を引いたものと思われる。

書写年代ははっきりしない。本奥書と思われるものも数か所書かれており、一図一図がそれぞれ別の資料から引用されていることが想像される。また図そのものも途中で切られているなど、後世の段階でかなりの手が加えられているようである。

最も新しい年記を持つ本奥書は慶長一〇年のもの。本資料の成立は少なくともそれ以降になる。

【書誌】

外題・「車絵図 一（二）」無地料紙題簽（一五・三糎×三・〇糎に墨書）

内題・なし

表紙・青鈍色地唐草文様（刷）表紙

見返し・金切箔

高さ・三六・〇糎

印記・①「大日本帝国図書印」「彰考館」②「大日本帝国図書印」「彰考館」「日本政府図書」③「大日本帝国図書印」「彰考館」「日本政府図書」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

本資料にはいくつかの本奥書が見えるが、写年・書写者については不明。

慶長一〇年の年記が見える第三軸目の末尾の本奥書には、「本云／右件之車図者申請九条禅定殿下円性／秘在御本命右少将言緒預令書写実以可／為後昆亀鏡矣」とあり、出家して円性と称した関白九条兼孝の所蔵していた資料を書写したことがうかがえる。なお「本云」は右肩に墨書されており、後補の筆と思われる。

【二一八】車勘例並図 嘉永元年写 三軸

坊城家旧蔵「請求番号一四七・〇七二九」

本資料は前掲資料同様、公卿や殿上人が用いた乗り物（神輿、仏輿含む）の先例を図示した資料。手彩色、三軸。

前掲資料と大きく異なるのは、『西宮記』『権記』『明月記』など数多くの日記類を引用し、有職故実の資料として徹底した調査がなされ、それらが本文にまとめられている点である。その分、図は少なく、①三図、②四図、③四図となっており、これらも古い絵巻類からの引用であると考えられる。

外題には「車勘例並図」と墨書されており、「勘例」の文言から、本資料が朝廷の諮問に応じてまとめられた報告書（勘文）であることが想像される。但し、裏打ちがされていない点などから見て、草稿もしくは作者が手元に残すために製作した写しであると思われる、そのためか奥書は他見を戒めている。軸もなく、簡易的な装丁である。

作者は、幕末に議奏・武家伝奏などを歴任した坊城俊克。議奏としては日米通商条約問題、將軍継嗣問題などに関与し、また武家伝奏としては和宮降嫁・將軍徳川家茂上洛などの調整役となった。文久元年には和宮の関東入興に従って下向。慶應元年に従一位となり、同年に六四歳で没した。有職故実に関する膨大な著作がある。

坊城家は歴代好字の士を輩出し、坊城家の人々による手沢本は多く伝来している。明治二五年に坊城俊章から家蔵の一四五〇冊が内閣文庫に献納されており、本資料はその中のひとつである。

【書誌】

外題・①②③「車勘例並図 三卷之内」打付墨書

内題・なし

表紙・香色表紙

見返し・金切箔

高さ・三八・五糎

字高・三二・〇糎

印記・「俊克之章」

備考・楮紙、手彩色、裏打ちなし、軸なし

【写年・書写者】

本資料には三軸それぞれに奥書がある。

①「件卷者借受蔵人左少弁胤保予書写之／於図者入魂于大和権介哲長令画畢堅／不有他見所秘蔵者也／嘉永元年十一月 頭右大弁藤俊克」

②「件卷者借受待中左少丞胤保令俊政／書写於図者入魂大和権介哲長令／画畢堅不有他見者也／嘉永元年仲冬／頭右大弁藤俊克」

③「件卷者借受蔵人左少弁胤保令俊政／書写又於図者入魂大和権介哲長令／画畢堅不有他見者也／于時嘉永元年仲冬／頭右大弁藤俊克」

これらの奥書によれば、第一軸目は「蔵人左少弁胤保」所蔵の資料を借り受けて、坊城俊克地自身が書写したものである。「大和権介哲長」の手に拠る。第二軸目と第三軸目は本文の書写は俊克の養子である坊城俊政の手。

「蔵人左少弁胤保」はおそらく公武合体派の公家として知られる広橋胤保のこと。「大和権介哲長」は「二尊教院縁起絵」を描いた堤哲長のことか。

【二一九】町見図 天明元年写 一軸

昌平坂学問所旧蔵「請求番号一九四・〇二二九」

本資料は天明元年に幕臣の高橋至時が記した測量図の習作。手彩色、一軸。

「町見」とは土地の測量のことを差し、本資料は建物の高さや木の高さを参考に土地の面積を測る方法が図示されている。特に注記されているのは「水縄」（検地用具のひとつ）の張り方である。全八図。

奥書によれば、書写者は幕臣の高橋至時。大坂に生まれ、安永七年に大坂城定番同心となり、寛政七年には江戸に出府、天文方に任じられ、寛政暦の編纂に尽力した。享和四年に四一歳で没。伊能忠敬の師としても知られている。またシーボルト事件で処罰された高橋景保は子。

本資料には昌平坂学問所の印記が見られ、安政七年に収蔵されたことがわかる。のちに内務省地理局の所蔵となっている。

【書誌】

外題・「町見図」 打付墨書

内題・なし

表紙・海松色地瑞雲文（織）表紙

見返し・金切箔

高さ・一九・〇糎

印記・「編修地志備用典籍」「浅草文庫」「日本政府図書」「安政庚申」「昌平坂」「至時之印」「子春」

備考・楮紙、手彩色。

【写年・書写者】

奥書は以下の通り。

「天明元辛午年 高橋小太郎ノ六月己亥日」

奥書の下部に捺されている「至時之印」「子春」は至時の印。

高さ・二六・五糎

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十四年購求」「宝」

備考・楮紙、手彩色、紺色の箱（二八・〇糎×七・〇糎×七・五糎）入り

【写年・書写者】

奥書は以下の通り。

「右三十品余所愛惜之物也此外雖有數百藏ノ東都別荘庫中故不能図于茲矣令所描贈ノ之者其十之一也為憐同好之意聊供玩弄之具而已莫棄置幸甚ノ叱羊亭ノ菅原嘉（印）」

これによれば、江戸の別邸には数百に及ぶコレクションが収蔵されていたという。そのうち手元にある三〇点を選んで本資料にまとめ、同好の士に贈ったらしい。その相手まではこの奥書からはわからない。

奥書の下には菅原嘉の印と思われる「宝」の字の壺印が捺されている。

【二二二】鳥類の図 写年不明 一軸

内務省旧蔵「請求番号一九七・〇二九五」

本資料は様々な鳥の図を収載した博物画。手彩色、一軸。

ヒヨドリを先頭に、九官鳥や雉など様々な鳥を詳細に描いた資料である。在来種のみならずオウムなども描かれている。

彩色がされていない箇所があったり、様々な大きさの料紙が継がれている点からみて下絵の段階であることが想像される。表紙には三・八糎×二・

【二二〇】奇石図 写年不明 一軸

内務省旧蔵「請求番号一九七・〇二九一」

本資料は菅原嘉が収集した珍しい石を、産地などと共に図示した資料。手彩色、一軸。

本資料には、珍しい模様や形などをした「奇石」が、三〇点図示されている。それぞれに産地、名前、特徴などが注記されている。

これを記したのは菅原嘉という人物で、本資料の奥書のほかにその伝を知る術はない。おそらく江戸時代中期〜後期の博物学者で、全国から「奇石」を収集したようである。記載の図には越前産の石が目立つことから、越前の人と推定される。号を叱羊亭。

本資料の奥書によれば、同好の士のために書かれたものらしい。明治一四年に内務省が購入した。

【書誌】

外題・なし

内題・なし

表紙・海松色地亀甲繫（織）表紙

○糶の小さな題簽が付され、「鳥類の図」と墨書されているが、極めて簡易的なもので後補の可能性が高い。外題の上からはさらに朱書で「博物」と書かれているのが見えるが、一部欠けていて判読できない。これらは分類のために旧蔵者が手を入れたと想像される。題簽の下には「雑」と墨書。書写者は不明だが、詳細な筆致から見て絵師に手によるものと想像される。

明治一二年に内務省によって購入され、のち農商務省などの所蔵を経て現在に至る。

【書誌】

外題・「□□□／鳥類の図／博物」無地料紙題簽（三・八糶×二・〇糶）
内題・なし

表紙・縦刷毛目表紙

高さ・二七・〇糶

印記・「農商務省図書」「太政官文庫」「大日本帝国図書印」「明治十二年購求」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

本資料には奥書が存在せず、写年・書写者は不明。

【二二二】風鳥暗呼類 武蔵石寿筆 天保元年頃写 一軸

武蔵石寿旧蔵「請求番号一九七・〇二九三」

本資料は幕臣の武蔵石寿の手に拠る鳥類の博物画である。手彩色、一軸。本資料は江戸時代に流行した舶来の鳥類を图示した資料で、「風鳥類」（フウチヨウ科の鳥類、極楽鳥とも）と「暗呼類」（インコ科）に分類している。これらの鳥類は主にニューギニア原産の極彩色の羽を持つもので、一八世紀〜一九世紀のヨーロッパで珍重され、日本でもまたその影響を受けて流行した。こうした背景の中で編まれた資料だと考えられる。

題簽には「風鳥暗呼類」と墨書されているが、後補と思われる筆で「博物」と朱書されている。その下部にも書き入れがあるが、磨滅して判別不能。

本資料は武蔵石寿の自筆。石寿は幕臣であると同時に優れた本草学者・博物学者であり、本資料はその業績のうちのひとつである。本資料には「武蔵石寿庫印」「竹石主人武蔵吉恵印」など石寿の用いた印が見え、料紙の継ぎ目にも「石寿」印が捺されており、しばらく石寿の手に所蔵されていたものと思われる。

明治一二年に内務省が購入。農商務省の旧蔵を経ている。

【書誌】

外題・「風鳥暗呼類／博物／□□」無地料紙題簽（二・三・八糶×二・〇糶）
内題・なし

表紙・横刷毛目表紙

高さ・二六・七糶

印記・「農商務省図書」「太政官文庫」「大日本帝国図書印」「明治十二年

購求」「武蔵石寿庫印」「竹石主人武蔵吉恵印」「石寿」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

末尾に「翫阿翁／武蔵石寿（印）」の署名がある。捺されている印は「竹石主人武蔵吉恵印」である。

「風鳥類」の末尾に「文政十三仲冬」の年記が見えることから、文政一三年（同年の年末に改元して天保元年）以降の書写であることが指摘されている。

【二二三】奇魚類 武蔵石寿編 天保年間写 一軸

武蔵石寿旧蔵「請求番号一九七・〇二九六」

本資料は深海魚などの珍しい魚類や海獣の図をまとめた資料。手彩色、一軸。

本資料の外題は「奇魚類」となっているが、実際には珍しい鉾物や考古物も含む。全体を通して一人の人物が書写したのではなく、それぞれ独立した一枚物を継ぎ合わせて一軸に仕立ててある。そのため、筆跡はすべてまちまちで、また方向が違っていたり、刊本も混ざっているなど雑多である。おそらく手元にあった資料を、散逸を防ぐために卷子本に仕立てたのだろう。そのため、それぞれの資料の書写年代も異なっているが、文政一二年頃／天保年間にかけての年記が多く見られるため、天保年間に編集したと考えるのが妥当か。

編集したのは前掲と同じ武蔵石寿。本資料中に数か所の署名が認められるほか、「武蔵石寿庫印」の朱印が捺されている。

明治一二年に政府が購入した。

【書誌】

外題・「奇魚類」無地料紙題簽（二三・五糎×二・〇糎）に墨書

内題・なし

表紙・紺色表紙

高さ・二六・五糎

印記・「農商務省図書」「太政官文庫」「大日本帝国図書印」「明治十二年

購求」「武蔵石寿庫印」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

前述の通り、文政／天保年間にかけて書写あるいは出版されたものを中心に編集してある。一部は石寿自身の自筆。

【二二四】魚類図巻 天保年間写 一軸

内務省旧蔵「請求番号一九七・〇二九六」

本資料は魚類を图示した資料。手彩色、一軸。

冒頭から鱒、秋刀魚など、身近な青魚が詳細な筆致で描写されている。このほか亀やスッポンなど水辺に住む動物も图示されているが、本資料で

特筆すべきは河童である。数種類の河童が描き分けられており、また実際に見たかのように細部まで描かれている。

天保五年の年記(「天保甲午二月廿日」)のある識語が挿入されているが、それによれば江戸の魚屋である越後屋清六が目撃したという。この識語を記したのは本草学者の福井春水である。

福井春水は下谷三味線堀に住んでおり、本草学の様々な著作を残している。本草会・薬品会を度々主催したことがわかっているが、生没年ははっきりしない。名前を潤。号は春水のほか多識堂。

但し、本資料の識語は河童の部分に対するもので、他の図とは全く別の資料であろう。本資料も前掲資料同様、元は別々の資料だったものを継ぎ合わせて編集したと想像される。

明治一二年に購入され、農商務省などの旧蔵を経ている。

【書誌】

外題・「魚類図巻」 四周単辺刷題簽(二九・〇糎×三・八糎)に墨書

内題・なし

表紙・香色表紙

高さ・二六・〇糎

印記・「農商務省図書」「太政官文庫」「大日本帝国図書印」「明治十二年購求」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。前述の通り、本資料に収録された福井春水の識語は天保五年の年記が見えるため、少なくともそれ以降に編集されたこ

とがわかる。

【二二五】南海異魚図 写年不明 一軸

農商務省旧蔵「請求番号一九七・〇二九八」

本資料は本草学者の山中明海が編んだ暖かい海に生息する魚類を图示した資料。手彩色、一軸。

シイラやマトウオウオなど、日本近海でも暖流に乗ってやってくる暖かい海に住む魚類を詳細に描いている。

作者は本草学者の山中明海で、伊勢の裕福な酒造家に生まれ、自ら薬草を栽培するなどして本草学の研究に努めた人物である。奇石の収集家でもあり、様々な著作を記している。通称を甚作、号を芳山。文化四年に五三歳で没。

本資料は木村兼葭堂が所蔵していた資料を書写したものとされる。冒頭の内題の下部に「兼葭堂」の朱印を模写してある。元の資料を忠実に写そうとしたことが見え、誤字に関しては「本ノママ」など朱で注記してある。

【書誌】

外題・「南海異魚図」無地料紙題簽(二七・〇糎×三・〇糎)に墨書

内題・「南海異魚」/「図」

表紙・海松色地唐草文様(織)表紙

高さ・二六・〇糎

印記・「農商務省図書」「太政官文庫」「内閣文庫」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。

【二二六】蚌蛤螺図并和歌 写年不明 一軸

農商務省旧蔵「請求番号一九七・〇二九四」

本資料は貝類と和歌を併せて描いた絵巻。手彩色、一軸。

本資料は様々な貝類を手彩色で図示し、前半部はそれを著名な歌人に見立てて貝にまつわる和歌を併せている。後半部は貝の図のみ。貝のほかにも、亀や蟹など、水辺に生息する生物も含む。図はかなり詳細である。

文政一二年に捕獲された頭が二つある亀の図がある。但し、この部分のみあとから貼り付けた様子が見受けられる。

【書誌】

外題・「蚌蛤螺図并和歌」無地料紙題簽（二四・〇糎×二・〇糎）に墨書

内題・なし

表紙・香色布目型押表紙

高さ・二六・五糎

印記・「農商務省図書」「太政官文庫」「内閣文庫」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

前述したように、頭が二つある亀の図の部分にのみ、年記が書かれている。

「双頭亀／文政十二年己丑年／五月於房州／獵師捕之同／年九月写之」

これによれば、文政一二年五月に安房で捕獲された亀を、同年九月に書写したということがわかる。但し、この亀の部分は、後から本資料に貼り付けされたとみえ、本資料の写年と同一かは不明。少なくとも、それほど時間は離れないとは想像される。

【二二七】花譜 写年不明 一軸

内務省旧蔵「請求番号一九七・〇二九二」

本資料は花ごとに漢名・和名・俗名を付して詳細を描いた図鑑。手彩色、一軸。

花は特に分類された様子はないものの、詳細に描写されている。一部には書写した時期が記されており、本資料に載録された花々の多くは五月・六月の夏の花が中心となっている。

明治一三年に購入された。

【書誌】

外題・「花譜」金切箔料紙題簽（二九・五糎×二・三糎）に墨書

内題・なし

表紙・紺色地唐花文様（織）表紙

高さ・三九・三糎

印記・「大日本帝国図書印」「農商務省図書」「太政官文庫」「明治十三年
購求」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため、写年・書写者は不明。

【二二八】淡路国所産皺竹総図 写年不明 一軸

大学校・大学旧蔵「請求番号一九七・〇二九九」

本資料は「皺竹」という品種の竹を図解した資料。手彩色、一軸。

「皺竹」はマダケの一種で、棹に皺が刻まれていることからこの名前がある。茶杓や花器などに利用されることもある品種である。

本資料では、卷子装の横長の画面を縦に用いることで、長い竹の全体像を描いている。前半部はタケノコの状態を二図、後半部は生育したあとの竹の棹を中心に描いている。

形や大きさに対する注記（墨書）がある。タケノコに関しては味についても記してある。

外題には「皺竹写真図／淡路国／所産／全」とあるが、「淡路国所産」の部分
部分が朱書になっており、後補と思われる。

【書誌】

外題・「皺竹写真図／淡路国／所産／全」無地料紙題簽（一七・八糎×二・〇糎）に墨書

内題・「淡路国所産皺竹総図」

表紙・黄檗色表紙

高さ・二六・〇糎

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」「大学蔵書」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため、写年・書写者は不明。

【二二九】調布玉川鮎取図 河島雪亭（河尚明）写 寛政七年写 一軸

内務省旧蔵「請求番号一八三・〇八四七」

本資料は玉川（現在の多摩川）での鮎漁の様子を描いた絵巻。卷子装、一軸。手彩色。

山水画風の筆致で多摩川沿いの風景や、鮎漁の様子が描かれている。

奥書には「示時寛政七乙卯歳仲夏／雪亭河尚明画」とある。「雪亭河尚明」とは絵師の河島雪亭のこと。寛政年間に活動したものと見られ、当館所蔵の四季遊獵図も手掛けている。

裏打ちには雲母引で、見返しには金切箔。

本資料は明治一四年に政府が購入した。

【書誌】

外題・「調布玉川鮎取図」無地料紙題簽（二七・五糎×三・〇糎）に墨書
内題・なし

見返し・金切箔

表紙・海松色雲文地鳳凰文様（刷）表紙

高さ・二九・五糎

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十四年購求」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

奥書に拠れば寛政七年の書写。

【書誌】

外題・なし

内題・「毛氈製造道具一式絵図」

見返し・浅黄色梨地

表紙・藤色雷文繫地唐花文様（織）表紙

高さ・二六・〇糎

印記・「大橋」「太田文庫」「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十

二年購求」

備考・楮紙、手彩色

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため、詳細は不明。

【二三〇】毛氈製造道具一式絵図 写年不明 一軸

内務省旧蔵「請求番号一八三・〇八五一」

本資料は毛氈の製造過程を図解した資料。卷子装、一軸。手彩色。

資料の前半には、毛氈の製造に用いる道具が、寸法などを注記した上で詳細に図解されている。後半は、具体的な製造工程が描かれ、唐人風の人物が羊毛を集めて織物にし、染色するなどの様子が具体的に描かれている。

表紙裏に「大橋」の印記と、符丁と思われる墨書がある。

本資料は明治一二年に政府が購入した。

【二三一】陶冶概見図 木翁撰 写年不明 一軸

農商務省旧蔵「請求番号一八三・〇八四八」

本資料は陶器製造の過程を図解した資料。卷子装、一軸。手彩色。

原料となる土の採掘から始まり、練りや素焼き、釉薬をかける工程などが詳細に図示されている。唐人風の人々が描かれている。

本資料には「木翁」という人物の手に拠る序文があるが、詳細は不明。

本資料は農商務省の旧蔵で、蔵書印のほか、「農商務省／図書／第二七六号／共一卷冊」と印刷された蔵書票（六・三糎×七・八糎）が、資料冒頭に貼付されている。表紙は海松色の織物で装丁されていたようだが、劣化

して裏打ちの紙がむき出しになっている部分のほうが多い。

【書誌】

外題・「陶冶概見図」無地料紙題簽（二六・八糎×三・〇糎）に墨書

内題・「陶冶概見図」

表紙・海松色（織）表紙

高さ・二六・二糎

印記・「農商務省図書」「太政官文庫」

備考・楮紙、手彩色、農商務省蔵書表（六・三糎×七・八糎）貼付

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため、詳細は不明。

【二三二】金吹方之図 文政九年写 一冊・二軸

旧蔵者不明「請求番号一八三・〇八四五」

本書は絵巻二軸と「訳書」一冊で構成されるもので、現在の造幣局に相当する金座の様子を描いた貴重な資料である。絵巻はそれぞれ上巻二六図、下巻二九図、計五五図が収載。すべて手彩色で、画面上部に場面を示す番号と標題の書かれた付箋が貼付されている。順序は以下の通りである。

（上巻）「第一 後藤三右衛門役宅之図」↓「第二 御勘定方御見廻り之図」↓「第六 使者之間之図」↓「第七 引替所之図」↓「第十二 金

改之図」↓「卷十三 吹元金を渡す図」↓「第二十八 金之鋼気を改める図」↓「第二十九 延金附口成り金之図」↓「第九 後藤三右衛門役人詰所之図」↓「第四十 小判・分判等極印打之図」↓「第四十三 小判・分判色改之図」↓「第四十四 吹立出来金目方再吟味之図」↓「第四十五 包立箱詰之図」↓「第八 御勘定方御詰所之図」↓「第十一 御見廻り之図」↓「第十 金座人詰所之図」↓「第四十二 色附出来金下改之図」↓「第二十五 差銀掛改之図」↓「第二十三 判合勘定之図」↓「第十四 諸山吹金等之位を定める図」↓「第三十六 金座人験極印之図」↓「第三十一 中揉之図」↓「第三十 荒切之図」↓「第三十二 金座より小判・分判吹屋へ渡す由」↓「第三十七 真揉之図」↓「第五十四 金座・吹屋金吹職人共、御用済み帰りの節改めを請る図」

（下巻）「第五十五 鎮守杜之図」↓「第四 鑑札改め之図」↓「第五 金銀之箱運び出し候図」↓「第四十一 吹立出来色附之図」↓「第三十九 式分判・老分判・老朱判等形を造る図」↓「第二十七 棹金を打ち延す図」↓「第五十一 卸吹之図」↓「第四十八 巧盤を製する図」↓「第十五 碎金之図」↓「第十六 焼金之図」↓「第十七 焼金仕揚之図」↓「第十八 焼金上り寄吹之図」↓「第四十九 汰り方之図」↓「第二十六 判合吹棹金之図」↓「第二十 花降銀目方掛改之図」↓「第十九 灰吹銀を花降銀ニ吹き揚候図」↓「第二十二 留吹銀吹揚之図」↓「第二十一 花降銀目利之図」↓「第三十三 荒切打延之図」↓「第四十六 小判瑕直しの図」↓「第三十四 小判之両面平らかにする図」↓「第三十八 小判槌目打之図」↓「第三十五 吹屋棟梁験極印之図」↓「第二十四 老朱金位組合之図」↓「第四十七 老朱金八十盤を以て計る図」↓「卷五十三 御金箱運び入れ之図」↓「第三 御用蔵之図」↓「第五

十 金銀の屑物焼砕の図 ↓ 「第五十二 卸吹所烟抜之図」

これら五五図の絵はすべて金座での作業工程を描いたものであるが、必ずしも順番通りには描かれていない。おそらく幕府の機密保持を目的として、意図的に順番を改竄してあると思われる。絵毎に継ぎ目がない点から見て、製作された当初からこのような順番に変えてあったのだろう。これらは、添えてある「訳書」に照らし合わせないと、どの図がどの作業工程を描いたものであるか判別することが不可能になっている。

絵師は幕府御用の町絵師であると考えられるが定かではない。絵の筆致を見るに、少なくとも三人の人物が関わっていると思われる。

見返しは上下に金切箔。絵にも金泥が一部利用されており、絵の質はかなり高い。

なお、本書の類本には、日本銀行が所蔵する「金座絵巻」が知られている。収載する絵図は計四三図で、本書よりも少ないため、本書の抄録写本ではないかと考えられている。

本書に関しては、紅葉山文庫・昌平坂学問所・和学講談所のいずれかに所蔵されていたと思われるが、旧蔵を示す印記はなく、「浅草文庫」の印が最も古いものであり、詳しい来歴は不明。

以下、「訳書」と絵巻の書誌をそれぞれ示す。

【書誌】

① 「金吹方之図訳書」

外題・「金吹方之図訳書」 中央四周双边刷題簽（一六・五糎×五・〇糎）
内題・なし

表紙・改装香色布目型押表紙（二六・二糎×一七・六糎）

墨付丁数・二四丁

字高・二〇・〇糎（每半葉六行）

印記・「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」

② 「金吹方之図」

外題・「金吹方図絵」 金切箔料紙に墨書（一七・三糎×二・五糎）

内題・なし

表紙・金茶色地草花文様（織）表紙（高さ二七・〇糎）

挿絵枚数・五五図

印記・「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」

備考・挿絵右肩に標題の付箋あり。

【写年・書写者】

「訳書」の奥付（二四ウ）には次のようにある。

「右は文政元寅年より新規式分判吹立、同二／卯年より小判・壺分判吹直、同七申年より新規／壺朱判吹立被仰付候、右三ヶ条吹方手続之／図絵、金座人川村理兵衛・久保田吉六・永野次郎吉え／申付模写せしめ二巻となし、此老冊を添、其訳を示す／文政九年丙戌年秋八月」

これによれば本書が成立したのは文政九年のことである。

ここにある川村理兵衛・久保田吉六・永野次郎吉の三名は金座人（年寄役）であり、おそらく「模写」の監督をした立場の役人たちであろう。これによればおそらく幕府勘定所からの命により、御金改役の後藤三右衛門光亨の主導によって内部文書として製作されたものと考えられる。

ただし、絵師については不明。また訳書の書写者についても記載はない。

【二三三】金銀山敷内稼仕方之図 寛政一二年写 一軸

内務省旧蔵「請求番号一八三・〇八五四」

金山銀山の坑道（敷内）の様子を描いた絵巻。一軸。手彩色。図の中にはそれぞれ墨書で解説が付されており、訂正箇所には付箋が貼付されている。人物の役職名・仕事内容・道具名に至るまで詳細な解説がなされている。

描かれているのは、採掘、水替え作業、選別、冶金等の様子で、概ね、採掘から精錬に至るまでの順序通りに並んでいる。

冒頭はまず坑道内の様子である。採掘の様子は勿論、鉱脈を検分する山師や、掛樋道などで坑道内に溜まった水を流して作業する人々の様子が見受けられる。

この坑道内の様子の次に描かれているのは、釜口（坑道への入り口）の様子で、当木（坑道内で使用する材木）を切り出す様子などがわかる。

続いては鍛冶小屋・立場小屋などが描かれ、ここでは石撰に従事する女性たちの姿が見える。そのあとには番所など役人たちの詰所の様子が描かれており、ここでは、金銀山に出入りする職人や商人たちが多くいたことがわかる。

この後の部分には、金銀山のふもとの町家の様子も描かれている。酒屋や銀山御用の油売りなどが描かれ、坑内で働く人々を相手にした商売が成り立っていたことがわかる。そのあとに磨場や吹分床屋などの様子が描かれ、採掘された金銀が鑑定される様子までが描かれる。

本絵巻に描かれた金銀山は、本絵巻の外題によれば佐渡であると考えられる。佐渡の金銀山の坑内を描いた絵巻は、日本国内外に一〇〇点近く確認されており、度々変わる奉行や役人たちのために、江戸中期頃から坑内や作業の解説用に作られるようになったと指摘されている。本絵巻に関し

ても、そういった性格を持つものである可能性が高い。

本書は裏打ちがされておらず下絵の状態と思われる。高さは四四・五糎で、絵巻としては大型である。内務省以前の来歴は不明。

奥書によれば、寛政一二年、狩野融川の作を写したもの。

融川は浜町狩野家四代目狩野閑川の子で、寛政四年、父の跡を継いで奥絵師となった。名は寛信、初め友川、のち青梧斎と号する。文化五年に法眼。和歌は橘千蔭に学んでいる。自身の手がけた朝鮮国王への贈朝屏風に對し、老中が金砂子の厚薄に難を示したことに怒り、文化一二年三月一日、下城の途中で切腹したと伝えられており、「腹切り融川」とも称される。

その御用絵師である融川が手掛けたことを考えると、本絵巻の金銀山は、幕府直轄地であり、最も重要な場所でもあった佐渡と考えて問題ないと思われる。

【書誌】

外題・「□（欠字）之図」（打付墨書）、「佐渡金山図」

内題・「金銀山敷内稼仕方之図」

表紙・改装砥粉色表紙

紙高・四四・五糎

印記・「大日本帝国図書印」「内閣文庫」「日本政府図書」

【写年・書写者】

先にも指摘した通り、末尾の奥書に、次の通りある。

「寛政十二年三月／狩野融川法眼書うつす／者也」

落款などの印記は見えず、書写者は不明。

（調査員）